慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米山桂三著『社會調査 : 勞働・ 工場・ 漁村』
Sub Title	K. Yoneyama : Social research : labour, industry, fishing community
Author	十時, 嚴周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1956
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.29, No.7 (1956. 7) ,p.68- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19560715-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

過程についての説明をもつと詳細なものとしていただきたかつたという事である。第二は、民法の解釋に關しては、相當にくわしく論ぜられており（三三―八頁）、かつその所説に對しては勿論賛成であるが、更に解釋學以外の民法學の研究方法に關しても説明していただければもつとよかつたと思う。第三に、本書が體系整序を第一義とされたためと、紙幅の都合もあることだし、やむを得ない事とは思うが、なおあまりに説明が簡單すぎる部分もあるようである。例えば失踪宣告の效力に關する規定をもつて、失踪に關する限りすべての法律關係についての、特別法とみる見解をとられるようであるが（七三―四頁）、その理由があきらかでなく、又かような見解にもとずいて、失踪宣告後再婚した當事者の双方若しくは一方が惡意なときは、失踪宣告の取消によつて再婚はその效力を失い、失踪者との婚姻關係が復活するものと解せられている（七三頁）、のであるがここに『再婚はその效力を失い』といわれるも、現實の問題として、どういう取扱をしたらよいのかは、これだけではわからないように思う。即ち婚姻解消の方式としては、親族法に規定されたものしかないわけであるが、この方式のどれを利用したらよいとされるのか、或いは、特別な方式を考えられるのか不明確である。

ともあれ、本書ぐらい、一貫した體系のもとに書かれている民法總論はめずらしいと思う。すでに相當程度の民法の智識を有せられる方々は、方法論的反省のために、又今民法を學習しつつある諸君は、勉學の目標を確立し、民法學或いは法律學全般に對する正しい認識をもつために、――實際、科學としての法律學はいかに在るべきか、というような事を抽象的に論じたものを讀むのもよいが、本書を讀むことによつて、それにも增して、法律學の正しい在り方を、具體的な説明のうちにはつきり把握することができるであろう――ぜひ本書を讀まれることをおすすめする次第である。（早稻田大學出版部刊　定價四五〇圓）

（富崎俊行）

米山桂三著

『社會調査――勞働・工場・漁村』

I

この小稿の目的は、最近出版された米山教授の「社會調査――勞働・工場・漁村」を紹介し、本書を中心として社會調査が社會學の領域でどのような學問的意義を持つかを考察することにある。

わが國においても、いわゆる「社會調査」なるものが一種の新しい流行として戰後の學界、言論界を風靡しているが、その場合、概して社會調査とよばれるものと社會學理論の關係が大まかに見過されている傾向が強い。強いていえば、實際に調査したものであるが故に、その調査結果がこれまでの勘や思索に頼つていた結果と比較してより科學的である、といつた單純な論理がしばしば用いられているといえるのである。勘や思索に頼つていたものを經驗的に實證的に體系化することは科學の第一歩ではあるけれども、めくら滅法

に手あたり次第に事實を掻き集めてみても、それらは一向に科學性をたかめる筋あいのものではない。同じように、或る種の主張に都合のいいような事實のみを恣意的に掻き集め、掻き集めることを調査とよび、調査なるが故に科學的だというような論理は、本來の意味での「科學」とは何んの關係もない。

こういった點について、小稿は廣く「社會調査の科學性」を問題にするであろう。そのために本稿の論述の形態は、(1)社會學の領域において社會調査が重要な意義をもちはじめた經過を略述し、(2)社會調査と社會學理論の關係を二、三の通說を介して明らかにし、(3)本書で取上げられた社會調査の各例についてその理論的意義を紹介する、といった順序をとるであろう。

II

すべての科學がそうであったように、社會學もその過去に長い混迷の時期を過してきた。最近ティマシェフは過去百有餘年に遡る社會學理論の生成發展の過程を概觀し、それらの諸學說を次の四つの時期に分類している(Nicholas S. Timasheff, Sociological Theory, Its Nature and Growth, 1955)。

1. 開拓者の時期
2. 諸學派の鬪爭および進化論主義の全盛の時期
3. 逡巡の時期
4. 關連枠或いは統合枠に關する鬪爭の時期

神學と哲學の中世的首枷から社會學を解放した開拓者の時代は、また人類進化の最高法則を確信していた時代でもあった。スペンサーは宇宙進化論を說き、コントは觀念形態や人口形態についての多元的進化論を展開していた。また隣接科學の諸領域においても、マルクスの經濟進化論、モルガンの工藝進化論がみいだされた。

これらの進化論的社會學論も十九世紀最後の四半期に入ると、一つのドグマ——進化の理念——を共有しながらも、相互に激しく敵對する諸學派に分裂した。社會進化を決定する唯一の要因は何かという問題をめぐって、經濟的、地理的、氣候的、民族的等々のそれぞれの要素を唯一の決定要因だと主張する諸學派が、相互に徹底した破壞的批判を浴びせかけていた。

ところがこの種の果しない理論鬪爭からは、別段、飛躍的な創造的な新しい理論體系が生み出されるわけがなかった。というのは社會現象の一元的決定論がすべてそうであるように、一つの決定要因を確信するものは、それ以外のすべての決定要因を否定することによってのみ、自己の理論の妥當性を主張しうるに過ぎないからである。從ってそれらの論爭は、理論の鬪爭というよりは信念の鬪爭に近い性質のものであった。

その頃、この種の巨大なロマン的な理論體系を「嚴肅なる具體的事實」に徵して片ッ端から否定していく、いわゆる「否定學派」なるものが精力的な活躍を開始していた。この實證的經驗主義の一團は、進化論的社會學論のすべてをつぎつぎと徹底的に粉碎していったわけであるが、そうすることによってまた、社會學はその生成以來の一般的理論的方向(general theoretical orientation)を喪失した。

次の社會學の時代は、どのような理論が「科學的理論」であるか

を決しかねる優柔不斷の苦悶の時期に當る。このような時期に際して、經驗主義の立場をとる多くの學者は「事實を！　より多くの事實を！」探し求めたのであった。十九世紀の巨大な進化論的理論の誘惑から身をひいた彼等は、謙讓な態度でもって事實を觀察し、それらの觀察を基礎として、より嚴密な理論を構成しようとした。そのために「具體的事實」を觀察し收集する仕事に情熱を燃した結果、調査資料收集の全盛時代が生れたのであった。

しかしながら架空の巨大理論を排擊し「事實」を懸命に收集してみても、そのことだけでは、單なる「事實」の並列的累積が齎されるだけであって、それは一向に理論の培養土にもならないといったジィレンマに陷入る。（もつとも、戰後の日本で隆盛を極めたいわゆる「社會調査」なるものが、實は單なる事實の恣意的な收集に過ぎないものを、あたかも「科學的理論」であるかのように感違いするほど馬鹿げた誤りを犯しはしなかった。）それ故に、集積された「事實」を解釋し整序する方法を示す理論を持たなくては、それらの事實は何ら學問的に意味をなさない、といった當然の認識がおこるわけである。一九三〇年代から一九四〇年代の初期にかけて、社會學理論はその衰退期の最底線に下落したといわれているのはこのためである。

さてこういったみちゆきを辿ってきた社會學は、ここに再び理論構成の意義を再認識し、過去の諸理論の實質的な再檢討にとりかかったわけである。けだしその場合の學問的變化は、過去の巨大理論の亡靈を清算した上に立つて、改めて「事實」の諸關連の枠（frame of reference）を規定し、その規定のもとに具體的實證的な研究を通して諸特殊理論を構成する、ということであった。さらにまた、これらの諸特殊理論を輻合せしめうるような統合枠（frame of convergence）を規定する統合理論の展開が、次の重要な問題の一つとなったのである。いいかえれば、現代の社會學の中心問題は、ティマシェフもいうように、特殊理論のための諸概念圖式に關する活潑な論爭にあり、さらにそれらの諸特殊理論を統合するような諸體系理論の展開にあるといえよう。

III

ところで具體的實證的な特殊理論が部分的經驗的な認識に優れているとしても、これらの諸特殊理論の單なる並列的な集積結果からは、社會の全體的見透しをうることは誠に困難である。むしろアメリカ社會學が「個々ばらばらの經驗主義」と批判されたように、この種の部分的經驗主義に立脚する特殊理論は、それを何らかの全體的な見透しのもとに整序することなしには、到底この種の批判を免かれ得ないであろう。では個々ばらばらでない全體的認識のもとに、個々の具體的經驗的事實を如何に理論的に關連せしめることができるであろうか。或いは、經驗的に設定された莫大な諸命題を體系的に如何に統合せしめるか、また社會的現實をその全體的見透しのもとに最も適切に解明しうる觀點は何か、といったことがらが充分に考慮される必要がある。こういった點に現在の社會學理論の中心問題があり、經驗的實證主義を標榜する社會調査の理論的該心が、ここにひそんでいるといえるのである。

さてこれらの問題に關して、現在の理論社會學には、すでに確固

たる了解點が存在しているとみるのは早計であろう。というのは、最近の諸理論體系間の相互接觸が深まりつつあり、自然科學の方法に準據しようとする新實證主義の氣運が優勢であり、しかも分析的社會學派の鋭い洞察がかなり攝取されてきてはいるものの、この問題についての一般的結論は、未だに出ていないとみるほうが妥當であるからである。すなわち、この問題についての幾とおりかの理論的方向が、いまなお相互に對立したまま、それぞれの多くの同調者を從えて互に論陣を張っているからである。

一つの潮流はパースンズ一派の「行動の一般理論」に代表される（Toward a General Theory of Action, eds. by Talcott Parsons, Edward A. Shils, 1951）。この一派は實證的諸特殊理論を一つの理論體系に組織化しようとして、理論相互の關係を體系的に整序し、そのための中心概念を解明しようとする。文化人類學、社會學、社會心理學、パースナリティ研究、實驗心理學等の諸專門家が、それぞれの概念を相互に觸發させ、それに伴う共通の概念のもとに諸專門理論を體系化しようと試みているのである。

ところでこのような包括的な體系的理論體制の成立を將來に豫定しながらも、現在の段階では、現實に力の及ぶ限りの範圍内で具體的な資料を集め、それに適わしい特殊理論を構成しようとする、いわゆる「中間範域理論」の一派の存在も見逃しえない（Robert K. Merton, Social Theory and Social Structure, 1951）。この一派はマス・コミュニケィション、ビュロクラッシー、リーダー・シップ等の特殊な問題領域において、それぞれ優れた業績をあげている。しかもそれらの諸理論が相互に關連して積み重ねられるための、理論のコーディフィケーションをも重要視しているのである。

このような問題は、また文化人類學の領域においてもやや異った形態でもつて論じられている。文化人類學者が封鎖的孤立的な未開社會の研究から現代社會にその研究對象を擴大しはじめると、かつてそれだけでその社會の全體的認識が可能であった研究方法、調査技術が、實は現代社會では、部分的斷片的認識の域に限定されてしまうという事態にたち到るのである。例えばコンミュニティの研究にしても、未開社會では、コンミュニティとそれを内包する外部の社會との關係を比較的單純に操作して、ほとんどそれを無視してもかなり妥當な研究を行うことができるが、現代社會においては、非常に邊鄙なローカルなコンミュニティの研究においてすら、そのナショナル・レベルとの關係の處理に非常な困難が横たわっている。ローカルなものをローカルな斷片そのものとして取上げたのでは、その社會の全體的考察にほとんど貢献するところがないばかりではなく、ローカルなものそれ自體が、現代社會の政治的、經濟的、文化的な影響を全く斷ちきって、ローカルに獨立して存在するということはほとんど考えられない。またそういった飛躍は、既に經驗的に妥當しなくなっている。そこで文化人類學者の或る一派は、ある特定のコンミュニティを研究するに際しても、その社會の社會文化的統合の水準を考慮し、ローカルな具體的事象をその統合のレベルと對應せしめながら調査することを主張している（Julian Steward, Theory of Culture Change, 1955）。しかも兩者の對應關係を直ちに一般論として體系的に規定することをしないで、その問題は、社會諸科學の協同研究（joint seminar）によって經驗的

に開發していくべきもの、といつた立場をとつている。

かくして實證的諸特殊理論と體系的統合理論との關係は、上からの閉鎖體制をとると下からの開放體制をとるとの相違は認められるとしても、またその限りにおける激しい論議が繰返されるとしても、相互に補い合い、一つの共通のゴールを頒ち合う關係にあるという意味で、密接な相互關係をもつている。すなわち、具體的實證性を缺く體制理論は、社會の全體性を恣意的に斷ちきる部分的經驗主義の理論と同樣に、その科學性を著しく毀損する。しかも兩者の關係を如何に把握するかの問題については、これからも數多くの論議が重ねられるであろうし、一應原則的には、兩者の歸納的性格と演繹的性格との循環過程を通して、生產的な觸發が行われるものと期待されているのである。

Ⅳ

さてこういつた際に米山教授の「社會調査――勞働・工場・漁村」が出版された意義は大きい。本書に收錄された六つの社會調査は、これ迄に教授が手がけられてきた、(Ⅰ)風太郎　(Ⅱ)職長　(Ⅲ)工場診斷　(Ⅳ)味噌工場　(Ⅴ)初島　(Ⅵ)漁村の人口問題、の多角的な諸問題に對して、それぞれ鋭い概念圖式のメスを入れている。しかも文化人類學、社會學、社會心理學、精神分析等の各專門領域の諸特殊理論を媒體とする緻密な概念圖式は、それぞれの問題領域のオリジナルな業績を示している。

いまそれらの各調査事例について若干の紹介を試み、これ迄に述べてきた社會學の中心問題に關連する本書の學問的意義を考察したいと思う。

風太郎　終戰直後の混亂期に發生した「風太郎」とよばれる無宿日雇不熟練勞働者を、ジャーナリズムがしばしば取上げるような好奇心によつて誇張し、惡しきステレオ・タイプを作りあげるといつた方法に取つてかわつて、文化人類學、社會學の理論を援用する調査方法でもつて研究しようとした社會調査の結果である。風太郎とよばれる一風變つた人間集團に對し、その外面的なエクセントリックな生活樣式に幻惑されることなく、機能主義人類學の均衡概念に立つて、その社會獨自の生活のメカニズムを解明しようとする。風太郎の社會のような、薄ぎたない犯罪の巢窟のようにみえる人間社會に對しては、單にそのもの珍しい斷片的な現象を繼ぎ合せたような恣意的解釋でもつて一般に判斷しがちであるが、このような社會に對しても、社會集團の分析に優れる特殊理論を、その問題に適合するような概念の圖式に組入れて、はじめてその社會獨特の仕組が理解されるのである。いいかえれば、このような概念圖式をもつことによつて、常識的には見逃しがちな匿れた重要な諸側面と、その相互的關係が明るみにだされるのである。

職長　米山教授は、アメリカで發達した產業社會學を日本に移植することに非常な關心を示し、早くからその理論をわが國の學界に紹介されてきたが、アメリカで驗證された實證的理論をわが國に應用する場合の文化人類學的な落差にも恒に注目されてきた。この調査研究は、そういつた野心的な狙いを具體的に實證しようとした初期の研究の一つである。アメリカの產業社會學には職長の地位と役割についての研究例が多いが、その研究結果から引出される理論

は、アメリカという文化の相對性によつて限界づけられているところが多い。そこで教授は、職長の地位と役割をわが國の歴史的過程の見透しのもとに規模別、企業別、組合有無別といつたあらゆる角度から多面的に研究しようとし、職長の地位と役割がそれらの諸條件に伴つて如何に變化するかを把握しようとする。しかも調査の方法は、自然科學における實驗の場合にみられるように、理論から抽き出された假説の驗證という手續きによつてまず打診研究（Pilot Study）を行い、その假説の妥當性を確かめた上で、全國的な統計的研究を企劃しようとされた。不幸にして全國的な調査は果されなかつたが、丹念な Pre-test が、將來この種の統計的研究に貴重な指針を與えていることは否定できない。

工場診斷　産業社會學的研究の重要な課題の一つに、工場における工員の志氣と生産能率の問題があげられるが、この調査は、そのような問題を理論の應用というたてまえから臨床的にアプローチしようとしたものである。社會學で社會診斷という場合、例えばマンハイム（Karl Mannheim, Diagnosis of Our Time, 1943）のように、社會の病理的現象を歴史の過程から巨視的に分析し、或種の有效な診斷を下そうとするものを意味するようにとられ易いが、この調査は、中工場の工員の志氣と生産能率を如何にすれば上昇せしめうるか、といつた點についての具體的な治療と對策の診斷を書いている。こういつた小集團の集團成員の志氣の研究は、一見非常に單純にみられ易いが、それは決していうように單純なものではなく、また複雜であるとしても、人間關係的アプローチでいわれるような心理學的な複雜さに盡きるものでもない。むしろ應用人類學的な觀點から解剖されるに適わしい、複合性と均衡狀態にあるものと考えられる。この調査はそういつた點で、ミクロ的な世界の複雜多岐な要因を浮彫にし、臨床的な立場が社會調査にとつて時に極めて有利であることを教えている。

味噌工場　親方も職人も一つ家に住み同じ釜の飯を喰いながら手工業的な家内勞働に從事する、といつたような古い時代からの職業集團が、大學出の社長や番頭あがりの職長や工員とよばれる職人衆に變貌した昭和の現代版になつて、果してどのように内容的に變容したか。これは興味ある問題であるばかりでなく、日本の産業構造の過半數を占めるこの種の二十名前後の非近代的な小工場を考慮することなくしては、日本の産業社會學を論ずることができないぐらい重要な問題でもある。教授はこういつた問題に早くから注目し、特に文化人類學的な方法がその複雜な謎を解く重要なカギであるという立場から、この二十數名からなる日本的工場の優れて日本的な勞働者のものの考え方や生活の樣式を明らかにしようとする。そして非近代化工場勞働者の欲求不滿の解明に問題をしぼり、綿密なケース・スタディを行つた。それにはこの味噌工場の歴史的背景、工場の構造、作業の種類、工場成員のスケッチが記述されており、この工場の勞働者の獨自の價値觀が分析されている。なおこの論文は次に述べる「初島」の論文とともに英語で書かれている。

初島　これは教授が終戰後はじめて實施された社會調査にあたり、本書に收錄されている諸調査研究の中の最も古いものの一つである。熱海から望見される初島を一つの纒つた社會として、その全體的な仕組みを探ろうとしながら、地理、歴史、人口、階層、家族

生活、經濟生活、村落生活について記述している。未だこの種の問題の調査經驗にとぼしかつた、と當時を述懐される教授は、調査費用その他の制約のために、初島についての深奥的な把握にまで到らなかつたといわれる。調査後約十年になろうとする今日、改めてこの論文を讀み返すと確かに若干の古めかしさを感じさせられるが、それは、調査理論や調査技術がここ十年間に如何に激しく變貌しているかを物語るよき證據でもある。も早や今日からみれば、初島を封鎖的孤立的な社會として靜態的に捉えようとすることよりも、日本のナショナル・レベルからの影響を如何に激しくうけているか、またそのことによつてこの社會にどのような變動が起りつつあるか、といつた點に調査の焦點を合せることが望まれている。いいかえれば「初島」についてのその後の變容過程が再び調査の對象に取上げられ「初島 in transition」の研究のおこなわれることが期待されているのである。しかもこういつたパネル式の調査が將來多くの理論的價値を齎らすものとして、社會調査の領域において盛んに用いられはじめている。

漁村の人口問題　これは本熟大學院社會學研究科委員會を中核とする、九十九里濱調査委員會のもとに行われている「九十九里濱漁村綜合調査」のうちの人口問題をあつかつた研究の一つである。調査の方法は、九十九里濱沿岸の最も代表的なコンミュニティと考えられる一漁村を對象とし、應用人類學的なアプローチによつて、漁村一般にみられる人口過剰の傾向が生ずる仕組を探求しようとしたものである。その際、人口といつた問題については一漁村に視座を限定して研究できるものではなく、もつと廣い意味での國家的なレベルにおいて機能する經濟的政治的文化的な諸要素との關連から考察することが要請される。すなわちこの場合、コンミュニティの研究をその社會の全體的見透しのもとに如何に取上げるか、といつた困難な問題に直面するわけである。そこで教授は、調査のはじめに小規模ながら Area Study の形をとろうとして、政治、經濟、法律、社會、醫學、工學等々の各專門家の協力による綜合研究を意圖された。しかも、綜合研究は最近の社會調査の最大の要請の一つとなつているが、各々その學問的背景や基盤の異る諸專門的研究を如何に綜合するかは誠に難しい問題であり、この漁村調査においても、緊急に解決を迫られる重要な問題點の一つとなつている。そしてこの種の問題の操作は、多くの試行錯誤を經て徐々に整備され精錬されつつあるが、未だにエレガントな解答を得る段階に迄は到つていない。從つてこの點に關して、試論的な本調査研究の理論上の限界と評價が下される所以であり、いいかえれば最初に計畫された綜合研究の趣旨が、この人口問題の研究にどのように活かされたか、という點が問題になるのである。

それはともかくとして、九十九里濱漁村に關する調査研究は現在も繼續中であり、フィールドにおける具體的な調査活動からこの種の多くの問題點を發掘し、それらの問題點についてあらゆる角度からアタックすることに社會調査の意義がみいだされるのである。

V

ところでこれ迄に述べてきた六つの調査研究から、教授は社會學理論の將來に何を期待しようとされているのであろうか。通常よく

行われるように、ほんの數例の調査研究から直ちにそれぞれの問題についての一般理論を導こうとするのであろうか。教授はそれとは逆に、より嚴密な理論の構成を目指して、これらの調査自體の價値を嚴格に「事例研究」の域に限定し、こういった綿密な調査研究の裏附けが數多く行われた後にはじめて社會現象の廣汎な數量的把握が實施されるべきである、という立場をとられている。そして科學理論の擴大を極めて愼重に將來に展望されているのである。また本書に收められている六つの調査は、一つ一つは必ずしも完結を期されたものではないが、むしろそれらは、相互に關連し合って社會調査方法論における教授の探索的な研究方向を示すものとして、意義あるものと考えられている。社會調査方法論の問題はいまだ未開拓の分野にあり、社會調査技術論のみが横行している昨今、この種の問題を改めて反省する必要があろう。

高校生の社會科の研究報告にも等しいような若干の事實と若干の數字が並べられているに過ぎないようなものまでをも含めて、ほとんどの人々がそれらを「社會調査」とよび、社會調査なるが故に「科學的」だと思いがちであるが、社會調査が科學的であるためには、如何に探求的な努力が拂われねばならないか、といったことを本書は雄辯に物語っている。そういった意味からも、本書が一般に廣く讀まれることを強く希望したい。

尙、本書は慶應義塾大學法學研究會の出版補助金にもとづく第一分册として出版されたものであり、今後、同補助金によって法學部關係者の著書が續刊される豫定である。（慶應義塾大學法學研究會刊　昭和三十年　二百十三頁　定價三百六十圓）　（十時嚴周）